

水野・中江選挙総決起体制を確立

— 第33回定期委員会 —



動労千葉第三三回定期委員会が、二月一日、千葉市民会館において開催された。

定期委員会は、議長に勝浦支部・吉清委員を選出し、冒頭あいさつに起った中野委員長は、今定期委員会で獲得すべきことについて、三点にわたり提起した。(要旨別掲)

続いて、組織内候補、船橋・中江、勝浦・水野両候補が登壇し選挙闘争への決意を表明した(要旨は二二日号に掲載)

質疑の中で出された意見・質問は：

①、一月二九日パンタグラフの損壊事故が発生した。このときの当局の対応だが、当該運転士(他労組)は明け番でまともな食事もとれない中、夜の九時頃まで状況報告を何度も書き直させられるという事があった。又、車両故障で快速列車が坂の途中で止まり、手歯止めを一旦箇所つけざるを得なかったが、このような対応で運転士が、事故の拡大を未然に防止したこと

に對し、支社は何の対応もしていない。

②、二月一日、一八三系特急運転士の乗務中容体が悪くなり、竹岡において代替乗務が行なわれたが、運転保安上重大な問題がある。支社を追及すべきだ。現在の極限的労働強化の中で、健康管理面からの対応を考なければならぬ時期に来ている。しかも、たまたま一八三系だったが二五五系車両だったら対応できなかった。われわれが主張したとおりの事態が発生した。又、二五五系の訓練の噂が出ているがどうなのか？

③、「鴨川運輸区構想」という噂があるが、何か具体的なものが出ているのかどうか？

④、「阪神大震災」の義援力ンパなどを通して、労働者としての絆を強固にしていきたい。営業合理化との闘いだ、売店の廃止、管内JCの子会社化、出向問題が来年度の施策では出てくるのではないか。原職復帰に向けた闘いを強化すべきだ。

そして本定期委員会において、関西労組交流センターが中心となつて行なっている、「阪神大震災」の救援活動に對し、労働者の側が労働者の救援活動を組織していく立場から、義援カンパについて当面半年間、そして現地の状況を見ながら視察団を送っていく考え方が提起された。また特別執行委員として、千葉運転区支部の中村栄一君が新たに指名され、満場の拍手で確認された。

水野・中江選挙闘争勝利に向け全組合員は総決起しよう！

震災を理由とした反動化の拍車

九五年その階級的性格

中野委員長あいさつ要旨

①、一二・二四の「二〇二億」取り下げは、国労を抱え込み楔を打ち込む質の変ったレベルの違う攻撃だ。攻撃の質と重さを受けとめ、原則的闘いを続けしていく体制を展開していくことが肝要だ。国鉄、三里塚、狭山と、三つの大きな闘いを、敗戦五〇周年の八・一五を契機にしながら打ち砕いていくといっても簡単に出来ない。九五年、清算事業闘争を中心とした国鉄闘争の解体なくして、戦争の出来る新たな国家体制づくりはありえないということであり、ここに敵の狙いがあった。

春闘を解体していく節目の年！

②、九五春闘は、「阪神大震災」がなければ、ゼロ回答・賃下げ春闘の始まりだった。大震災により、春闘どころではないという雰囲気の中で、連合幹部は責任を回避できた。春闘四〇年目の九五春闘は、年功序列型賃金、終身雇用制という仕組み、春闘を解体していく節目の年だ。その意図を暴露していくことが突破口となる。

動労千葉議員団への出発点！

③、水野・中江選挙闘争は、地方自治体に闘いを貫徹していく議員、地域住民の声を貫徹していく議員を、動労千葉の拠点のあるところにつくっていく出発点だ。とりわけ勝浦市議選には、茂原の旅行センターの所長がJR総連出身、JR千葉支社の全面的バックアップの下に立つようとしている。明らかに「水野追い落とし」という関係に入っている。断じて負けるわけにはいかない。

第三回定期委員会において選出された特別執行委員

| |
|---------|
| 中村 栄一 |
| 千葉運転区支部 |
| 三四才 |